

お爺さん三人の大連旅行 (1)

寺西 俊英

昨年(2018年)8月、私と同じ住宅街に住む仲良しの三人で大連に行くことになった。出発時のSさん、Tさんと私の平均年齢は、74.3歳である。Sさんは中国大陸に足を踏み入れるのは初めてで、Tさんは二度目であるが二人とも大連は初めてなので、私がガイド役を引き受けた。中国に行く前は、二人とも日中関係が良好とは言えない中で中国は好きではなかったが、帰国してからは中国の庶民、歴史、文化を見直したようである。そしてマナーについても。今回の旅はどのようにして二人の中国への認識が好転するに至ったかも、都度出来事を挿入しながら綴っていききたい。

8月12日の朝、三人は新百合丘のリムジンバス乗り場にいた。飛行機は14時発・CA(中国国際航空)952便なので12時ころまでに成田に着けばよい。ちょうどお盆の帰省ラッシュの時期に当たり、前日の11日は成田空港は入出国者が最高の〇万人とかニュースで流していたので早めに行こうということになり、7時半過ぎに新百合ヶ丘に到着し、8時頃のバスに乗り込んだ。ところが道路はなぜか渋滞はなく9時半には空港に到着した。お昼まで2時間半もあり、兎に角朝食を摂ることにしてレストランでゆったりした。11時ころまでおしゃべりをしたが、そろそろレストランを出てCAのカウンターに行くことにした。Sさんが近くで元に換金したいということで窓口に並んだが、1万円は540元であった。CAのカウンターに行くと11時半から受付開始ということで並ぶことにした。搭乗券を発券してもらおうとなぜか二人の友人は隣同士の席で私は10列入口に近い席であった。結果的にこれが良かったのだ。というのは、飛行機に乗ると三人掛けの座席の二人の隣は中国人であった。その人は日本在住の大連人とのことで、大連空港に着陸するまでとても親切にしてくれたようだ。二人とも中国語は話せないのに、食事の時や入国カードを書くときなど大いに助かったようだ。飛行機はANAではなく中国機であるし、キャビンアテンダントは中国人ばかりで話は通じないし、

機内は大きな声の中国語が飛び交うし、入口に日本の朝刊は置いていないし、何となくイヤな気持ちを2時間45分のフライトの間に解きほぐしてくれたようだ。飛行機から降りた時、隣はいい人だったよ、と喜んでいて。

大連周水子空港には15時45分、ほぼ定刻通りに着陸した。入国審査も無事通過し、外に出ると友人の李さんがニコニコしながら迎えに来てくれている。本来は娘婿が愛車のBMWで来る予定が仕事のために来られなくなったという。迎えの車は日本でいうハイヤーで、駐車場で待たせていた。タクシーより料金は少し高いらしいが、車内は綺麗で運転手は小綺麗な服を着ている。運転もタクシーのように少し車間が空けば割り込んだりせず、安全運転だ。利用料金は後日銀行口座から引き落とされる仕組みだそう。大連に限らず中国のタクシーは、運転は荒っぽい、愛想は無い、おつりの紙幣はくしゃくしゃ、車内は汚れているのが相場である。このようなハイヤーが増えればイメージが随分向上するのに、と思う。

ハイヤーは、ひとまず常宿の大連駅近くにある「大連中山大酒店」に17時頃着いた。最上階の38階が回転する展望レストランの建物だ。フロントでパスポートを出す。部屋は、二人は26階、私は25階とここでも別の階となった。荷物を部屋に置きシャワーを浴びて18時にロビーに集合し、夕食の場所に向かった。夕食は、ホテルから歩いて6~7分のところにある大連一の中華料理店「万宝」である。5月にはアカシアの花が咲き乱れる労働公園の向かいにある。随分いいレストランを予約してくれたものだ。この手の大きなレストランは、1階の広い客席の周囲にいくつもの水槽が置かれ、その中にいる魚やエビ、カニ、大連名物の蝦蛄、貝類などを見て、ついて来ている従業員に注文し、続いて肉類や野菜などのコーナー等を一周しながら注文する仕組みである。大連は海鮮料理が有名なだけに海の幸は豊富である。個室は全て2階にあるので、宮殿のように天井から

はシャンデリアが重そうに垂れ下がり、彫刻された手すりの広い階段を上って行く。4人がドアを開けて中に入ると豪華な円卓が置かれていて壁には絵画が飾ってあり花も活けてある。まず青島ビールが来て乾杯となり、李さんは少し日本語がしゃべられるので和やかな雰囲気では話が弾んだ。青島ビールは度数が低いので下戸の私でもコップに2～3杯は大丈夫だ。そのうち次々に注文した料理が運ばれてきた。

20時近くになり私は明日(13日)の丹東旅行に随行してくれる友人とロビーでの打ち合わせの為にレストランを出た。二人は李さんが旅の疲れが取れるからとマッサージを勧めるので、彼女が知っている腕のいいマッサージの店に向かった。1時間が100元(日本円で約1600円)だったようだ。日本のビジネスホテルでは、大体1時間4千円～5千円というからかなりお得である。二人は2時間その店でゆったりと過ごし、22時半ころホテルに戻ったようだ。その間中、李さんはずっと付き合ってくれ、迷子になってはいけないのでホテルまで送ってくれたようである。二人はやさしい李さんにとっても感謝していた。

8月13日の夜が明けた。今日は、近年北朝鮮との貿易の窓口でテレビによく鉄橋の映像が出るので有名になった丹東に行く日である。飛行機嫌いの金正日が、中国に行くときに列車で渡った鉄橋である。昨夜の打ち合わせで、ホテルからすぐの大連駅から6時23分発のD7741の動車に乗ることにしてある。中国版新幹線は、通常新しく建設した「大連北駅」から出るが、そこまでタクシーで30分かかるので少し早い時間であるが大連駅から出発するこの動車にしたのだ。ちなみに中国版新幹線は大きく2種類あ

る。ハルピン行きなど長距離の電車は高铁と言い、時速300キロを超すスピードで走る。丹東など比較的近距离の電車は動車と言い、最高時速195キロしか出さない。5時半にロビー集合なので行くと友人はすでに待っていた。この友人も名前を李さんという。私の中国で参加したツアーなどの経験から中国人は時間にルーズな印象がある。しかし二人の李さんは、いつも時間に正確である。

ホテルから歩いて大連駅に到着し、手荷物を検査する機械に通しエスカレーターに乗って2階の待合室に向かう。大連駅は2階が発階で到着は1階と分かれている。大連駅の現在の駅舎は2代目であるが、1937年(昭和12年)に満鉄の太田宗太郎の設計によるもので、82年経った今でも外観は当時のままである。太田は、東京駅を設計した著名な辰野金吾の教えを受けており、上野駅をモデルにしている。大きな待合室も当時の面影を残している。しばらくするとアナウンスがあり乗客が立ち上がり3列くらいに綺麗に並んで静かに改札を通っている。割り込む人はいなかった。ホームに降りると大きくて長い真っ白い蚕のような16両編成の動車が待機しており、我々は15号車に乗り込んだ。動車は6時23分に音もなく動き出した。日本のように過剰な案内や発車のベルはない。社内アナウンスは次の通り2回だけであっさりしたものだ。日本のように少し遅れるだけで謝ったり、あれこれ言い訳するようなアナウンスはない。

★女士们紳士们列車前方停車站(駅)是○○(みなさま、この列車の次の停車駅は○○です)

★下一站(駅)請提前做好准备(準備)(次の駅で下りられる方は早めに準備願います)

同じ口調なのでおそらく録音を流すだけと思える。検札には来ないし車掌は何をしているのだろう。この動車は時刻表によると到着時刻は9時31分であるが、丹東には9分遅れの9時40分に到着した。勿論遅延したお詫びの言葉は無い。この国全体が細かいことは気にしない適当(?)な体質があるのではなかろうか。(続く)



大連一のレストラン「万宝」の2階にて